

学位請求論文の内容の要旨

論文提出者氏名	病態制御 領域 内分泌代謝内科学 教育研究分野 氏名 大高 英之
<p>(論文題目)</p> <p><b>Association between insomnia and personality traits among Japanese patients with type 2 diabetes mellitus</b>          (日本人の2型糖尿病患者における睡眠障害と性格との関連性について)</p>	
<p>(内容の要旨)</p> <p>2型糖尿病は、網膜症や腎症などの細小血管障害、脳梗塞や心筋梗塞などの大血管障害、といった様々な合併症を引き起こす。海外において睡眠障害と糖尿病発症率の関係、合併頻度の高さが報告されてきており、糖尿病に睡眠障害を合併すると、患者のQOLが低下するだけでなく、種々の身体疾患や精神疾患を招く危険性が増大する。睡眠障害および糖尿病双方の適切な介入が必要であるが、本邦においての調査報告は少ない。また、睡眠障害と性格との関連性についても示されてきてはいるが、2型糖尿病患者での調査は多くはない。</p> <p>そこで今回2型糖尿病患者における、睡眠障害の合併頻度について、また睡眠障害の有無と患者背景や性格との関連性について検討した。</p> <p>対象は、当科に外来通院している2型糖尿病患者504名(男性293名/女性211名、年齢63.9±12.5歳)とした。睡眠障害、性格調査、抑うつの有無に関してはそれぞれ質問紙法を用いて調査した。</p> <p>睡眠障害の評価は、睡眠の質、入眠時間、睡眠時間、睡眠効率、睡眠困難、睡眠薬の使用、日中覚醒困難の7要素の合計スコアで算出される、PSQI-J(日本語版Pittsburgh Sleep Quality Index)を用いた。PSQI-Jの合計スコアが5.5点以上の症例を睡眠障害ありとした。さらに睡眠障害の有無と年齢、性別、BMI、HbA1c、生活歴(喫煙歴、飲酒歴、独居、運動習慣の有無)、性格検査などの患者背景との関連性について検討を行った。性格検査は、TIPI-J(日本語版Ten Item Personality Inventory)を用い、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性の5つの項目で評価した。他、抑うつの有無をCES-D(the Center for Epidemiologic Studies-Depression scale)で評価した。統計学的解析はt-testsおよび<math>\chi^2</math>-testsを用いて行った。結果は、睡眠障害の合併頻度は、2型糖尿病症例504名のうち154名と30.6%であった。患者背景においては、女性、独居者、BMI高値において、有意に睡眠障害を合併する頻度が高かった。性格検査においては、神経症傾向が高いと睡眠障害を合併する頻度が高く、協調性が低いと合併頻度が高いという結果であった。抑うつにおいては、抑うつ有では睡眠障害を合併する頻度が高かったが、抑うつと性格では相関関係を認めるため、多変量解析の際には除外した。HbA1c、喫煙や飲酒、運動習慣などの生活歴に関しては、睡眠障害の有無で有意な差を認めなかった。PSQI-Jの7要素のうち、神経症傾向においては、睡眠の質、入眠時間、睡眠時間、睡眠効率、睡眠困難、日中覚醒困難の6つの要素に相関を認めた。</p> <p>日本人の2型糖尿病患者では睡眠障害の合併頻度が高く、その一因として性別、肥満、抑うつ、個々の性格も関与することが示唆された。性格を含めた心理状態への介入も、今後の糖尿病治療に役立つものでないかと考えられる。</p> <p>今回の研究は横断研究であり、またコントロール群との比較のないものであった。単一施設による研究でもあったため何らかのバイアスが生じた可能性もあり、今後更なる研究、調査をすすめていく必要があると思われた。</p>	